「ジュニアレンジャープログラム」米国国立公園及び日本における歴史と展開

西　祐香（帝京科学大学　環境教育・インタープリテーション 研究室）
指導：古瀬浩史
キーワード：米国国立公園、ジュニアレンジャープログラム、日本との比較

1.　はじめに

インタープリテーションの先進国であるアメリカの国立公園では、ジュニアレンジャープログラム（以後 JRP と記す）と呼ばれる子供が楽しみながら公園の資源について学ぶ事ができるプログラムが広く普及している。日本でもアメリカの JRP を模した同様の名称のプログラムの取り組み事例がある。しかし、アメリカ国立公園の JRP の全体像や日本の事例との違いについては、日本ではあまり知られていない。

そこで本研究では、米国における JRP の起源や現状を調査し整理した。さらに、日本での取り組み事例を調べ、日米を比較する事で課題や展望について考察した。

2.　方法

(1) アメリカの「JRP」の調査

アメリカ国立公園局の JRP についてインターネットを使用して調査を行い、JRP の起源や発展の経緯、現在行われているプログラムの全体像を調査した。また、帝京科学大学環境教育・インタープリテーション室に所蔵されている JRP のブックレット（教材）および、個人が所有しているブックレット（合計 14 冊）について調べ、内容を類似するカテゴリーに分け、特徴を明らかにした。

(2) 日本での「JRP」事例の調査

日本で JRP を行なっている施設や公園を対象にアンケートおよびインタビューを行い、プログラムの目的や内容について調査した。調査の対象とした施設は以下の通りである。

【インビュー実施施設】

- 東京都立奥多摩湖畔公園
  山のふるさと村ビジターセンター
  2018 年 11 月 15 日
- 谷津干潟自然観察センター
  2018 年 11 月 22 日

【アンケート実施施設】

- 豊田市自然観察の森
- 東京都立奥多摩湖畔公園 山のふるさと村ビジターセンター

3.　結果

(1) アメリカの「JRP」の調査

「JRP」の経緯

インターネット上の資料[2)] から得られた JRP に関するトピックを年表（資料１）にまとめた。1930 年、ヨセミテ国立公園にヨセミテジュニア自然学校が開校され、JRP の前駆となる子ども向けのプログラム「ジュニアナチュラリストプログラム」が行われた。このプログラムでは、フィールド体験や自然観察、ゲームを含む活動が行われた。これに続きセコイヤ国立公園、ロッキーマウンテン国立公園、その他の首都内およびその周辺の国立史跡でも子どもを対象にしたプログラムが行われ始め、独自のプログラムを持つようになった。そして、1940 年に開催された第２回自然国立公園会議の議題に、同様のプログラムが取り上げられた。

1950 年にニューメキシコ州で山火事から子グマが救出されたことがきっかけとなり、1952 年には山火事防止の啓発目的で米国森林局によって「ジュニアフォレストレンジャープログラム」が行われた。このプログラムでは、修了するとジュニアフォレストレンジャーグッズ等がもらえるというシステムが導入された。また、米国森林局のキャラクターである「スモーキーベア」をシンボルにすることで子どもたちに高い人気を博した。この成功から、イエローストーン国立公園では、1960 年に米国森林局の事例に習ったシステムを導入することが検討されたという記録がある（子ども向けのプログラムは 1947 年から行われていた）。これらが現在に至る JRP の先駆けであると考えられる（イエローストーン国立公園では、1992 年に JRP が始まったとされる記述があったり、同公園の「遺産リサーチセンター」に 1984 年の JRP バッジが保存されていたりする等、異なる記述も見られた）。1960 年後半には、いくつかの国立公園で同様のプログラムが普及していたようである。2005 年には、全国基準の JRP が制定された。2007 年に、その当時ファーストレディであったローラ・ブッシュが JRP を支援するためにザイオン国立公園に訪れたとの記録もある。

「JRP」の概要

JRPは、アメリカの政府機関である国立公園局等が提供する国立公園の資源を学ぶことができるプログラムである。「ブックレット」と呼ばれるデザイン性の高い冊子教材を基盤にしており、多くのプログラムは一日で終えることができる。基

本構成として、はじめに参加者は公園内のビジターセンターで無料のブックレットを手に入れるか、店舗で３ドル以下のものを購入して参加する。そのブックレットに記された年齢ごとの課題に沿ってフィールド体験などの活動を進めて行く。また、公園によってはレンジャーによるプログラムへの参加が必須というところもある。この一連の活動を完了させた参加者は、公園内のレンジャーとブックレットの回答を共有し、ジュニアレンジャーの宣誓を行った後、証明書と公式バッジまたはパッチを受け取ることができる。このプログラムの対象は基本的に５歳～13歳までだがどの年齢でも参加することができる。プログラムは「探検、習得、保護」の標語を元に構成されており、「州立公園や国立公園のあらゆる側面、つまり豊かな生物多様性、歴史、そして娯楽の機会を子供たちに紹介すること」[4] が目的と設定されている。

図−１　公園毎のブックレットとバッジ類

図−２　実際のレンジャーバッジを模したバッジ類

図−３　バッジ、パッチ類一覧

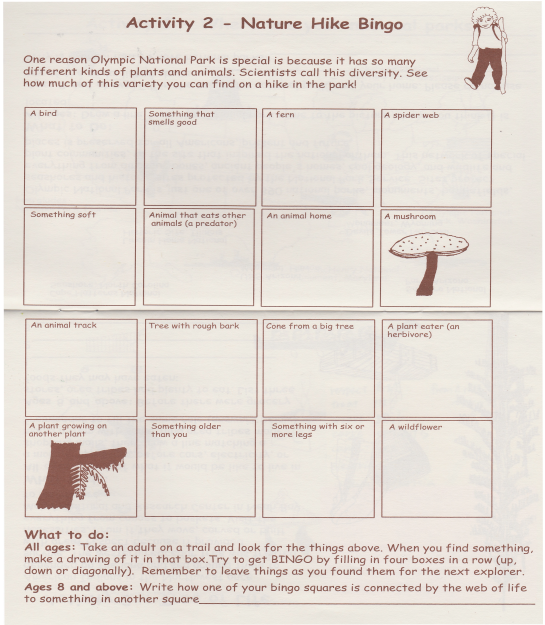
図−４　修了者へ贈呈される証明書

「ブックレット」の構成

JRP の 14 冊のブックレットで扱われている内容について調査した結果、内容を次の 10 項目のカテゴリーに分けることができた。

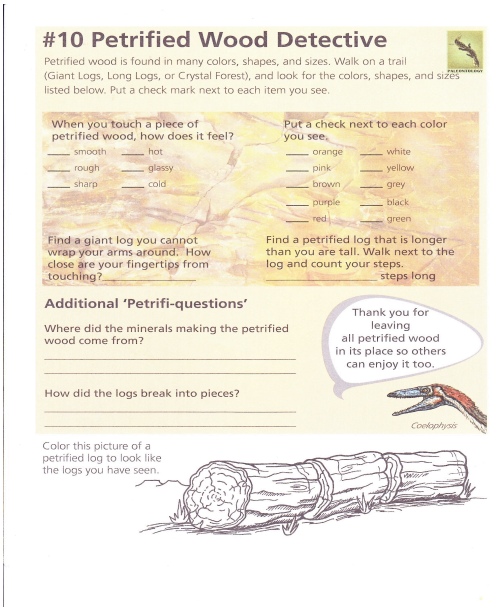
・フィールド体験
・スケッチ・お絵かき
・記述・穴埋め問題
・記録
・ゲーム要素
・日記
・読み物
・詩（俳句）作
・作文
・言語パズル

以下に代表的なブックレットの内容の例を挙げる。



図−５　オリンピック国立公園のブックレット

図−５は公園内で発見したものを記録し、ビンゴで遊ぶという構成になっている。これは「フィールド体験」と「ゲーム要素」、「記録」のカテゴリーに整理した。

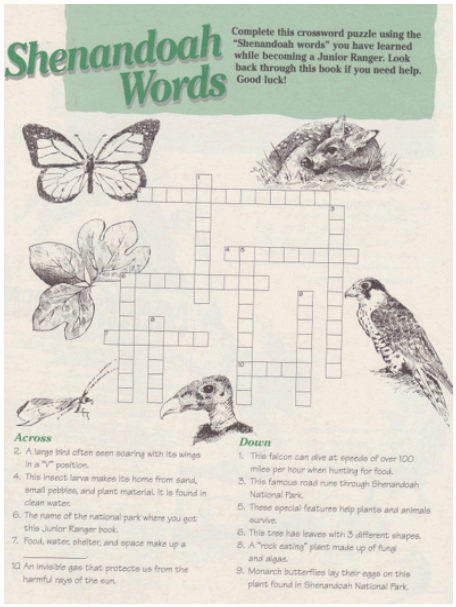


図−６　ペトリファイド･フォレスト国立公園のブックレット

図−６は、公園内で見つけた木の化石について記録し、それについての質問に答えるという構成になっている。これは、「フィールド体験」、「記録」、「記述・穴埋め問題」のカテゴリーに整理した。

図−７　イエローストーン国立公園のブックレット

図−７は、自分が参加したプログラムについて学んだことなどを記すという構成になっている。これは、「フィールド体験」と「日記」のカテゴリーに整理した。



図−８　シェナンドア国立公園のブックレット

図−８は、シェナンドア国立公園に生息している動植物についてのクロスワードとなっている。これは、「言語パズル」のカテゴリーに整理した。

図-９　ポイントレイズ国立海浜公園のブックレット

図-９は、先住民であるミウォク族について書かれており、ミウォク族について学べるようになっている。これは「読み物」のカテゴリーに整理した。

これらのカテゴリーが 14 冊のブックレットの中でどの程度利用されているかについて、図-10 にまとめた。
「フィールド体験」、「スケッチ・お絵かき」、「記述・穴埋め問題」、「記録」の項目は 14 冊すべてのブックレットで扱われていた。

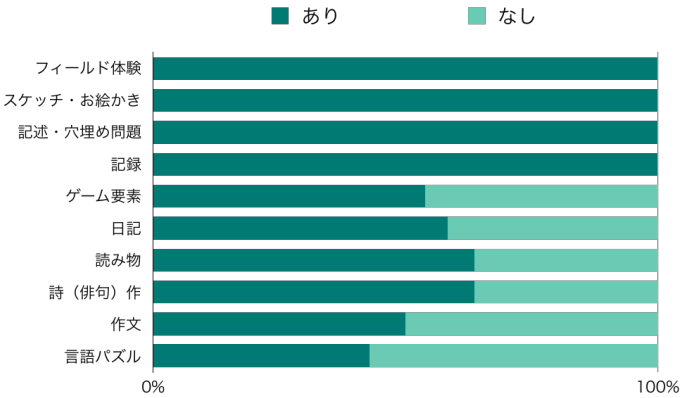


図-10　ブックレットの代表的な内容と掲載されている割合

「ブックレット」の構成　まとめ

ブックレットで扱われている内容は、国立公園毎の資源によって異なるものの、ブックレットの構成には高い共通性があることがわかった。フィールド体験を伴う項目が全てのブックレットに見られたということから、フィールドでの直接観察や体験を促すことが重視されていると考えられる。JRP は、最後の修了式を除くと、参加者が自分で取り組む「ノンパーソナルのプログラム(インタープリターがガイドしない)」であるため、飽きさせない仕組みとして「ゲーム要素」のカテゴリーが多用されているものと考えられる。14 冊全てに見られた「記述・穴埋め問題」は、参加者が公園の資源について深く考察することを促しているのではないかと考えられる。その他にも、「言語パズル」の中のクロスワードパズルはブックレットの終盤にあることが多かったことから、JRP で学んだことの総復習としての位置づけで利用されているのではないかと考えられる。

「JRP」の多様化

現在、アメリカの JRP は国立公園ごとだけではなく、様々なプログラムが展開されている（図-11）。

国立公園ごとの JRP では、417 箇所の国立公園ユニットのうち 260 箇所が、各国立公園のホームページからダウンロードできる。さらに、国立公園ユニット以外では、米国魚類野生生物局や中西部考古学センターと国立公園局が共同で作成した「釣り」や「考古学」をテーマにしたブックレットや、「コウモリ」などをテーマにしたブックレットなどもある。これらは国立公園局のサイトからダウンロードすることができる。「釣り」をテーマにした JRP では、利用者が訪れたい公園に「釣り」のブックレットとバッジが利用可能かどうか連絡し確認してから参加する。また、課題を終えたブックレットを撮影し、それを国立公園局宛に電子メールでおくったり、そのものを郵送したりすることで公園から公式バッジと証明書を受け取る事ができるものもある。いくつかの公園でも郵便で JRP の修了を受け付けている公園がある。これらは直接訪問することができない場合でも子どもたちにその場所について学ぶ機会を提供している。さらに、大統領就任式や桜まつりなどの特定の期間のイベントに参加しアクティビティを行うことでそのイベント固有の証明書とバッジを受け取ることができる JRP もある。その他の教材として、インターネットを活用したゲーム感覚で体験できる JRP、「ウェブレンジャー」がある。また、「ジュニアレンジャーのための歌」と呼ばれる教材もあり歌詞と 20 ページほどのブックレットと地図を含む CD が販売されている。これは、国立公園局のホームページで歌がダウンロードできるようになっている。アメリカでは JRP が子どもたちに高い人気があり、多くのグッズなどが販売されている。

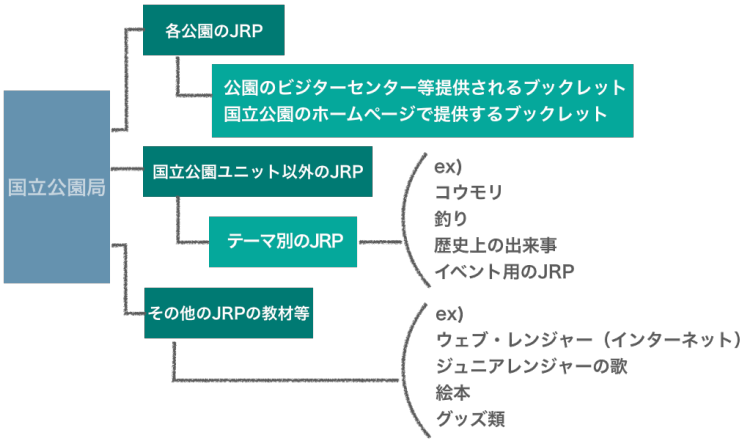


図-11　「JRP」の多様化の樹形図

2.　日本での「JRP」事例の調査

調査対象とした日本の３施設についての調査結果を以下に示す。

東京都立奥多摩湖畔公園山のふるさと村ビジターセンター

東京都立奥多摩湖畔公園山のふるさと村ビジターセンター

で行われている JRP は、1992 年に始まり、2006 年にリニューアルされた。このプログラムはアメリカの JRP をモデルとしているが、構成は異なっている。最も異なる点は、ブックレットは用意されず、参加者の繰り返し利用（来訪とプログラム参加）を想定し、ステップアップ式を取り入れている点である。また、ステップごとに異なるねらいが設定されている。ステップ 1〜3 のねらいはそれぞれ「自然の中で過ごすことの楽しさを知る」、「自然の不思議を自分の力で見つけられるようになる」、「主体的に自然に関われるようになる」である。基本構成は、はじめにビジターセンターにてジュニアレンジャーカードを作り、ジュニアレンジャー登録を行う。その後アクティビティに参加する度にカードにスタンプを押す事ができる。アクティビティは 1 日 2 つまで行うことができる。各ステップのアクティビティすべてを終了できた後、ビジターセンタースタッフと参加者のマンツーマンの特別活動に参加する。この一連の活動を終了させた参加者は、認定式を行いそこで認定証（図-12）とワッペン（図-14）が贈呈されるという構成になっている。その後、更に上のステップを目指すことができる。対象は、ステップ 1 が小学 1 年生から 2 年生、ステップ 2 が小学 3 年生から 4 年生、ステップ 3 は小学 5 年生から小学 6 年生が想定されている。中学生は「山ふるレンジャー」に参加できる。しかし、どの年齢からでもステップ 1 から始めるのが原則となっている。今までの登録者数はリニューアルした 2006 年からの数で、約 1956 人である。2018 年までのステップごとの修了者数は、ステップ 1 は約 1118 人、ステップ 2 は約 985 人、ステップ 3 は約 82 人である。いずれもリニューアルした 2006 年からの数となっている。山のふるさと村の JRP の目的は、「自然に親しむことで自然に対し自ら行動できるようになる」ことである。

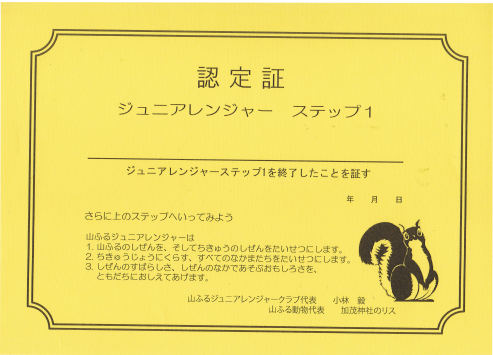


図-12　贈呈される認定証

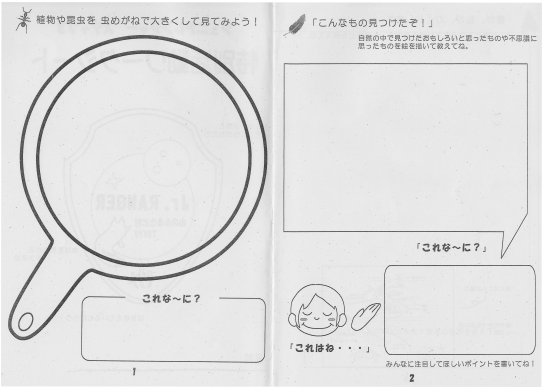


図-13　ステップ３でのワークシート

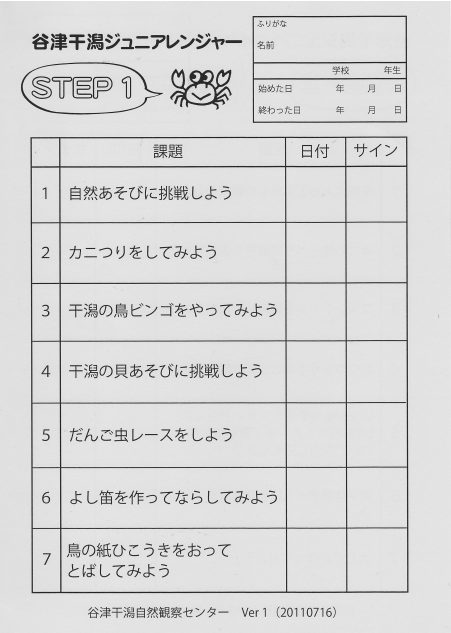
図-14　贈呈されるワッペン

図-15　山のふるさと村のジュニアレンジャーデスク

谷津干潟自然観察センター

谷津干潟自然観察センターで行われている JRP は、2003 年に始まり 2011 年にリニューアルされた。ラムサール条約登録地の施設でもあり、干潟について学ぶ機会を参加者に提供している。このプログラムの目的は環境保全を自発的に行う人を教育するということである。山のふるさと村と同様、ステップアップ式を取り入れている。基本構成として、1 日 2 つまで行えるアクティビティに参加し、アクティビティカード（図-16）にスタッフのサインをもらう。そのカードに記された 7 つすべてのアクティビティに参加しサインをもらい、証明書とバッジを受け取ることでステップ 1 は修了できる。ステップ 2 も同様である。これらの活動はいつ来ても行えるような取り組みがされている。ステップ 1 では「谷津干潟公園

内の身近な自然と親しむ活動」を、ステップ２では「谷津干潟の生き物や自然の楽しさに気づく活動」を主としている。ステップ 3 は、「谷津干潟を知る活動（干潟の生き物調査など）」、「人に伝える活動（来館者の案内や活動の紹介など）」（図-18）、「谷津干潟を守る活動（干潟のゴミを拾いや生き物のすみかづくり）」、「交流活動（国内、国外の湿地に関わる人との情報交換）」の 4 つの活動を柱にしている。これらは、年間合計 29 の活動のうちそれぞれ 4 つずつ、計 16 の活動に参加することとし、活動記録シートに記録していく。ステップ 3 からの活動は指定された日時にメンバーが集まって行うイベント型の活動と随時参加できるものがある。これらを修了すると、証明書とバッジ、名札を受け取ることができる。さらにその上のステップに「リーダー」というものがある。谷津干潟自然観察センターの JRP の特徴の一つに、専用のユニフォームがあり、子どもたちの参加意欲を促していることが挙げられる。また、ステップ 3 においては、他のラムサール条約登録施設との交流が盛んであり、今まで学んだことを発信し、参加者の学びをより深める機会となっている。更に、子どもたちの自信や刺激にもつながっており、他の施設との有効な情報交換の場ともなっている。2018 年度には、ジュニアレンジャーの中から 2 人、オーストラリアのブリズベン市との交流に参加した。対象は、放課後の子どもたちを対象にしており小学 3 年生以上である。このプログラムは、東京都立奥多摩湖畔公園の JRP と千葉県浦安市郷土博物館の JRP ではないプログラムをモデルとしている。


谷津干潟ジュニアレンジャー

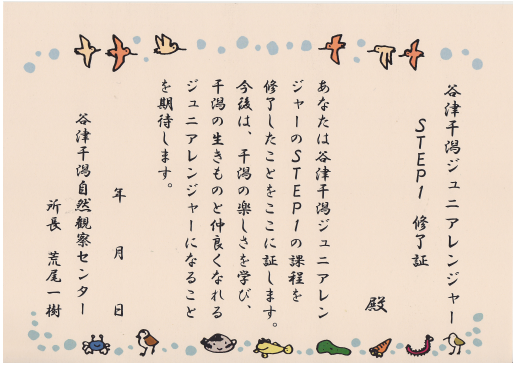
STEP 1

ふりがな	
名前	
学校	年生
始めた日	年　月　日
終わった日	年　月　日

	課題	日付	サイン
1	自然あそびに挑戦しよう		
2	カニつりをしてみよう		
3	干潟の鳥ビンゴをやってみよう		
4	干潟の貝あそびに挑戦しよう		
5	だんご虫レースをしよう		
6	よし笛を作ってならしてみよう		
7	鳥の紙ひこうきをおって とばしてみよう		

谷津干潟自然観察センター　Ver 1（20110716）

図-16　ステップ１でのアクティビティカード


谷津干潟ジュニアレンジャー

STEP1 修了証

殿

あなたは谷津干潟ジュニアレンジャーのSTEP1の課程を修了したことをここに証します。今後は、干潟の楽しさを学び、干潟の生きものと仲良くなれるジュニアレンジャーになることを期待します。

年　月　日

谷津干潟自然観察センター
所長　荒尾一樹

図-17　贈呈される修了証

図-18　贈呈されるバッジ類

図-18　ジュニアレンジャーが作成した展示物

豊田市自然観察の森

豊田市自然観察の森の JRP は 2014 年に開始された。山のふるさと村と谷津干潟自然観察センター同様、ステップアップ式を取り入れている。対象は、愛知県豊田市内の小学 4 年生から中学生までとなっている。経緯として、自然学習施設での利用者の低年齢化が進んでおり、小学高学年から中学生の利用が少なくなっているという現状があったことからこの年齢層が主対象として設定された。また、この年齢層を対象に

して施設を利用してもらうことで、その家族や友人などにも利用してもらう波及効果を狙っている。このプログラムの目的は「生物多様性保全の次世代育成」が設定されている。参考にしたモデルは、横浜自然観察の森（現在は行われていない）である。

4. まとめと考察

アメリカと日本のJRPを比較すると、アメリカでは、政府機関である国立公園局が一貫して実施しており、全国の国立公園において共通形式で行われている。国立公園毎のデザイン性の高いブックレットやバッジ類があることより、参加意欲が高められ、様々な国立公園の資源についての自発的な学習を促していると考えられる。一方、日本のJRPは、アメリカのJRPをモデルとしていながらも独自に発展していた。アメリカのJRPは一日で修了でき、様々な公園に訪れることを動機付けているのに対し、日本のJRPは、各公園施設等が独自にプログラムを実施しており、参加者が施設に繰り返し訪れることを動機付けるステップアップ式のシステムを取り入れている。日本のJRPは、参加者と公園施設との関わりを深め、環境学習をステップアップさせることによって、より深い環境についての学びや、自然を意識した行動を促していると考えられる。

山のふるさと村の「JRP」参加者のその後のエピソード

日本のJRPが、環境教育の深まりを狙っていることの成果を知るため、山のふるさと村ビジターセンターのJRPが参加者にどのような影響を及ぼしたのかを知ることを目的にし、JRP参加者のその後について尋ねるアンケートを実施した。

アンケート対象：山のふるさと村の職員および元職員
質問１：ジュニアレンジャープログラム参加者のその後のエピソード（例えば、進路、仕事、活動など）があれば教えてください。
質問２：ジュニアレンジャープログラムが参加者にどのように影響していると思いますか。

その結果、山のふるさと村ビジターセンターの職員、元職員から JRP 参加者の進学や就職、活動等に JRP が影響を及ぼしたと思われるエピソードを 11 例収集することができた。その 11 例のエピソードについては資料２にまとめた。

自然系の大学に進学したり、自然に興味を持ち収集した自然物の展示の作成や積極的にボランティアにも参加したりしている事例が複数あったことから、山のふるさと村ビジターセンターの JRP は、参加者の子どもたちに大きな影響を及ぼし、環境教育として大きな成果あげていることが考えられる。

5. 今後の展望

日本のJRPの今後の展望として、JRPのプログラムを行っている施設が交流する機会を創ることを挙げたい。谷津干潟自然観察センターの事例にあるようにジュニアレンジャー同士の交流は、子どもたちの学習に貢献するとともに、それぞれのプログラムの充実に寄与するものと考えられる。また、施設によってはアメリカ版のブックレットのような、ゲーム要素を含む項目などを取り入れたセルフガイドの教材を作成することで、スタッフへの負担の軽減につながる他、参加者層を広げることができるのではないかだろうか。

謝辞

本研究を進めるあたり、インタビュー及びアンケートにご協力いただいた東京都立奥多摩湖畔公園山のふるさと村ビジターセンターの右田様はじめとする職員、元職員の皆様、谷津干潟自然観察センターの星野様、芝原様、豊田市自然観察の森の猪俣様、ご指導いただいた古瀬浩史教授にこの場をお借りして感謝申し上げます。

参考文献

[1] 米国国立公園局ホームページ 「junior ranger program」 <https://www.nps.gov/kids/jrrangers.cfm> ※2018 年 5 月 10 月閲覧

[2] The Ranger Archivist「A brief history of the junior ranger」：<http://rangerarchivist.blogspot.com/2012/06/brief-history-of-junior-ranger-program.html> ※2018年6月5日閲覧

[3] ウィキペディア「junior ranger program」 <https://en.wikipedia.org/wiki/Junior_Ranger_Program> ※2018年7月16日閲覧

[4] THE TENNESSEE MAGAINE 「Adventures in Learning: Tennessee’s Junior Ranger Program」

[5] 秩父多摩甲斐国立公園　東京都奥多摩湖畔公園山のふるさと村ビジターセンター　平成１６年度　環境学習活動報告書：「ジュニアレンジャープログラムについて」

[6] 芝原達也・星野七奈・小山文子・永井祐紀・井坂紗弓・椎名明日香：「ラムサール条約登録湿地における子ども育成プログラムの明るい未来」湿地研究　Vol.4 No.1 2014 年 1 月　日本湿地学会

[7] 豊田市自然観察の森ホームページ「ジュニアもりレンジャーの Blog <http://blog.livedoor.jp/juniormoriranger-toyota/archives/cat_144781.html> ※2018 年 11 月 20 日閲覧

資料１：年表

1930 年 ヨセミテ国立公園にヨセミテジュニア自然学校がチャールズ A ハーウェルによって作られた。
JRP の前駆けの「ジュニアナチュラリストプログラム」が開始される。
1940 年 第二回自然国立公園の議題にフィールド体験や自然観察、ゲームを含むプログラムが取り上げられるようになる。
1944 年「スモーキーベア」が自然保護の象徴になる。
1947 年 イエローストーン国立公園の初期のプログラム、「ジュニアネイチャーエクスプローラー」が始まる。 「Jr. ネイチャーエクスプローラー」は各週の５日の午後２時～４時半に行われた。対象は６歳から 14 歳であった。
1950 年 ニューメキシコ州で山火事から小さなアメリカグマが救出され、国民の注目をあびる。
1952 年 米国森林局の「ジュニアフォレストレンジャープログラム」が始まる。
1953 年 ジュニアフォレストレンジャーバッジを同封した「スモーキーベア」のぬいぐるみが販売された。
1954 年　ヨセミテジュニア自然学校が閉校となる。
1960 年 イエローストーン国立公園において、「ジュニアフォレストレンジャープログラム」と類似したプログラムを検討する内容のミーティングが行われた。
1960 年後半 他の国立公園で同様のプログラムが普及した。
1984 年 イエローストーンの「遺産リサーチセンター」の博物館に、この年ジュニアレンジャーバッジが保存されている。
1992 年 イエローストーンのジュニアレンジャープログラムが始まったと一般的には信じられた。
2005 年 全国基準の JRP が制定される。
2007 年 4 月 29 日　　ザイオン国立公園において史上初となる「ジュニアレンジャーデイ」が開始される。
2007 年 4 月 30 日　　ファーストレディのローラ・ブッシュは「ジュニアレンジャーデイ」の開始を支援するためにザイオン国立公園を訪れた。
2007 年頃　　ウェブレンジャーが開始される。

資料２：JRP 参加者のその後のエピソード

A さん　高校では「小学校への環境学習プログラム」を研究し論文を執筆した。大学入試の自己 PR では JRP のことも作文し、東京農業大学に入学。
B さん　JRP 活動を通して、石や野鳥など自然への興味が広がり、鉱石を求めて全国行脚した。青梅の高校に進学し、山のふるさと村でアルバイトしている。
C さん　現在中学２年生。小学校のゲストティーチャーや収集した自然物の展示作成、サイエンスショーでの公演なども行っている。
D さん　八丈島の長期自然教室のボランティアスタッフとして活動。その時に海の自然に興味を持ち、東京海洋大学に進学。
E さん　八丈島の自然教室やジュニアレンジャーキャンプにボランティアスタッフとして活動している。
F さん　１０年前の将来の夢は「自然解説員」だったが、現在は音楽を通して、山のふるさと村で教わった「センス・オブ・ワンダー」の精神を伝えていく夢へと変化する。
G さん　森林・木材・山村・第一次産業をキーワードにして全国を行脚し、様々な立場から森林について学んでいる。
H さん　学生時はインタープリターを地元の自然に案内する、ガイドプログラムなどを行っていた。ジュニアレンジャーキャンプのボランティアスタッフ等で活動中。
I さん　「山火事注意」などのポスターで総理大臣賞を受賞する。（このポスターはその後山火事注意の啓発活動の一環として、ティッシュの裏紙として起用され全国に配布された。）
J さん　中学生版の JRP 活動を提案し内申書に載せることができた。その後、東京農業大学に入学。ジュニアレンジャーキャンプなどの活動のボランティアスタッフに精力的に参加している。
K さん　鹿児島大学共同獣医学部に在学中。ウミガメ研究会というサークルに入り、現在水族館と共同で環境教育を行えないかと探っている。